

國學院大學学術情報リポジトリ

〔紹介〕 松尾葦江編『ともに読む古典 中世文学編』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高山, 美佐, Takayama, Misa メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000366

〔紹介〕

松尾葦江編『ともに読む古典 中世文学編』

高山実佐

高等学校国語科の問題点として挙げられる、古典に対する学習意欲の低さについて、

・『古文』が好きか」に対して、「好き」又は「どちらかといえば好き」と回答した生徒の割合は31%

・『古文』の学習が必要だと思うか」に対して、「必要」又は「どちらかといえば必要」と回答した割合は38%

という報告がある^{〔1〕}。ここから、高校生の約七割が古典嫌いで、約六割が不要だと考えていることがわかる。本学学生の意識と

は遠い印象であるが、かつて都立高校に勤務していた頃の実感には近い数字である。「嫌い」の要因を学習指導の問題としてみると、例えば現代語訳を目標とする授業、初見の古典作品を読解する大学入試のための古語習得トレーニング・文法事項の暗記を学習内容とする授業、教師自身の古典作品への興味関心の薄さ等を挙げることができるのではないだろうか。そこに本書が刊行された。古典教育はいかにあるべきか、ともに読み、具体的に考えていくことのできる貴重な一書である。

「『古文は面白くない』って本当ですか？」（小助川元太）と始まり、中世文学の魅力と古典学習のヒントが満載されている。「ほら、こんなに面白いんだから！」と誘われるのは、

○古文嫌いの生徒に古文の魅力を伝えたいと考えている中学校や高校の国語の先生

○古文の授業は面白くないと思っている高校生

○中学校・高校の国語の免許を取りたいと考えている人

○古文は苦手だったけれど、少し勉強してみようかなと思っている大人

○古文の授業は面白くないと思っている高校生

○「古文なんて面白くない」と思っているのに、なんとなく気になってしまい、本を手にとってしまった、あなたとある。「ともに読む」ことが謳われている通り、研究者ではない私たちに、中世文学の確かな面白さと新しい教材の可能性や視点、メッセージが明瞭、簡潔に伝えられる。作品やその享受・継承の様相を通して、人間の生きること、抱えざるを得ない問い、おかしみ、つまらない教訓に回収されない知恵、それらを表現することはや文体等々と豊かに出会うことができる。第一部では「どこが面白いのか？」と、「中世の古典たち」一四点の面白さが説かれている。定番化されてしまったと言っ

ても良い現行教科書の教材群と比較するとき、その新鮮さは際立つ。以下、面白さの要諦を伝えるタイトル全てを挙げる。①世俗説話「亀の恩返しと絵仏の帰還」（伊東玉美）、②和歌「恋の歌の力——『百人一首』の魅力」（谷知子）、③西行・長明「西行と長明——乱世を生きたふたりの出家者」（吉野朋美）、④伝承の人物像「愛好する人々と共に生きる『人物像』——西行と義経」（花部英雄）、⑤明恵「人生を変えた神のお告げ——鎌倉時代のノンフィクション文学『明恵上人神現伝記』（平野多恵）、⑥仏教説話「笑いと涙の中世寺院——仏教説話を生み出す場」（牧野淳司）、⑦平家物語「眼で聴き、脚で見る——平家物語を読んでみよう」（松尾葦江）、⑧太平記「やりきれない話——高師泰の悪行とその被害者」（今井正之助）、⑨徒然草「背を向ける狢犬とすれ違う対話」（中野貴文）、⑩座の文芸「想像力のあそび——連歌」（深沢真二）、⑪世阿弥「詩人は最高の教師でもあった」（山中玲子）、⑫狂言「人間だもの、夫婦だもの——狂言（鎌腹）」（石井倫子）、⑬歌謡「室町時代の空気は読めるのか？——『閑吟集』の挑戦」（姫野敦子）、⑭御伽草子「室町時代を遊んでみよう——御伽草子『ものくさ太郎』を読む」（小助川元太）である。いずれも日本文学全体を視野に収めた上で、中世文学に表された人物、中世固有の社会・文化の思想

や所産、それを語る視線などが面白く語られている。その中で、先ずは研究者の熱い語りが読み手に迫ってくる。

例えば、『平家物語』の冒頭は「時空を越えた一般的な真理を、聴覚と視覚、漢語と歌語、唱導文芸的と和歌文芸的など、対の表現を少しずつずらして、ゆっくりと、うたうように、始動させていく」と解説され、続く「遠く異朝を」以下については「遠くから次第に近づいてくる叙述方法」により、地球、インド、中国大陆、その極東日本、京都の街と「宇宙からカメラが舞い降りていくようなイメージ」で「宇宙から地上へ、永遠の真理から過去に実在した人物伝へと、巧みに仕組まれたことばによって誘導される」と、この冒頭の巨大なスケールが眼前に鮮やかに蘇る。本稿の語りから、平家物語の表現の巧みと広大な世界を想うとき、人は自ずと「祇園精舎の鐘の声」と朗誦したくなるのではないだろうか。更にそうしたイメージに加え、諸行無常という一般的真理に対する、歴史の変転への政治家の責任という「大きな矛盾」が冷静に指摘される。「政治批判と鎮魂とが、押したり引いたりしながら物語の柱となり、主たる色調を決定していく」というのである。また、「実録ではなく、伝えたいことがあって作られた」特色に加え、様々な土地で源平合戦や敗者の記憶が守り育てられてきた、その作品の外にも

物語があることが特色であるという。「避けられぬ死の前に、ひとはひとに何ができるか、という重いテーマ」や「じつに多様な人生が、生き抜くとはどういうことなのか」が、物語『平家物語』の世界において、ことばにより表現される。さらに、各地の祖先たちが源平の戦を語り継いだ土地の物語が存在する。本文のみならず、諸本、教科書から飛び出した、風光明媚な旅先での物語との再度の出会いも楽しみになる。

また、例えば、西行と義経については「伝承の人物像」という視点から語られている。「博物館に展示される標本のように死物化したものではなく、評価する時代や享受者層の嗜好によって変わる流動的なもので、いうなら愛好する人々と共に生きていくもの」であり、「変貌する姿を積極的に評価する立場に立って、人間的現実を伝える『伝承の人物像』にスポットを当てて取り上げ」られている。西行に関しては、知識層の、生前の功績を称え尊崇する西行像と、一般大衆の、揶揄・嘲笑し文化を自らの生活感覚に変容させて楽しむ西行像との二面性が挙げられる。一方、義経に関しては、悲劇の英雄といった一貫した評価があり、国民的人気の高い伝承の人物であったと述べられている。中世文学に描かれた二人の傑物が伝承という形の中でどのように捉えられているのか、古典世界がどのように享

受されてきたのか、という視点に立つことで、中世文学を古典世界や古典授業の中に閉じ込めることなく、現代の私たちがどのような受け継いでいくのかと考え続けることを可能にしている。

信濃国一番の「ものくさし」（面倒くさがり屋）ものくさ太郎は、徹底したもののぐさぶりを行使する一方、謎かけ・和歌に長じ、当意即妙の応答と教養により美しい妻を得、さらに帝ゆかりの血筋であることが発覚し、最後は大明神として祀られる。このハッピーエンドで終わる『御伽草子』は、「退屈しのぎに読まれただけではなく、読むという行為そのものが幸せを呼ぶものと考えられて」おり、「物語が持つ祝言性を当時の人々が重んじていたことを示し」ているという。荒唐無稽とも言えるもののぐさ太郎の物語をおかしく読んだ後に、中世の「物語を読んだり語ったりすることに、幸せを呼ぶ力がある」という考えに出会い、現代にも通じることはや声の力を改めて確認することができるのである。

第二部では、「もっとと広がる面白さ」として四つの観点から更なる魅力が語られる。①時代「中世の古典作品にみえる女房」（松蘭斎）、②宗教思想「古典教育と宗教思想——中世は「宗教の時代」なのか?」（藤巻和宏）、③文法「文法が分かると何が分かるか」（吉田永弘）、④中高教科書の古典教材「国語教科書

での古文教材の扱われ方の現状と課題——小式部内侍「大江山の歌」説話を例に」（須藤敬）である。いずれも作品の内容を教室で考える際におさえたい問題を提示している。

例えば、文法教育の問題を「文法は古典を読むための手段としてしか位置づけられず、文法の学習それ自身が言語教育となることへの配慮が希薄である」とし、「説明がつかない」例の面白さが述べられる。学習指導の問題として、暗記を嫌がることに対しては、活用語を六つの活用形に分類する理由・規則を導いた過程を説明する力を備えること、また、適用の仕方が分からず役立たないという生徒たちとこそ、多義という言葉の本质に迫ることができ、言語教育の良い教材となること、さらに、読めないことに関しては、「研究者でも、原典そのものだけで理解することは稀で、漢字仮名交用句読点付きの本文、注釈、現代語訳を参照にしながら読むことが普通」で、異なる解釈が示され、すべてが分かるわけではないということ、などが述べられている。文法書の解説を暗記し、用例を当てはめることを目標とするのではなく、品詞分解と解釈の関係を自覚的にとらえ、文構造に着目したり、表現の違いに意識的になったりする、言語教育としての文法学習の意義を改めて考えてみたい。さらに付録資料として、教育現場への十全な配慮「二〇一六年度中

学校・高等学校国語教科書採録 中世文学作品一覽」(須藤敬編)と「主な中世説話集一覽」(編集部編)も編集されている。

「『ともに読む』の前には、うっすらと『次世代と』という文字を幻視していただきたい」と「教師の宿題——あとがきに代えて」にあるが、次世代、未来を担う生徒たちと日々、向き合っている一二名の先生方のコラムも収められている。「教師に必要なことは」(霧林宏道)、「古典の『事実』に学ぶ」(三浦敦)、「額の裂けた地蔵の話」(安村史子)、「教室で軍記文学を読むということ」(清水由美子)、「役に立つ『古文』(出口久徳)」、「古典なんて」(谷口耕一)、「なぜ古典を学ぶのか——授業の中から考えたこと」(須賀可奈子)、「高校生が感じることばの変化」(秋田陽哉)、「おれ古典いららないんだけど」(永濱知寿子)、「薩摩守忠度といふ人ありき」は誰の経験か」(富澤慎人)、「先生、文法を勉強すると古典が嫌いになるって本当ですか?」(目下田ゆず)、「紙の本はなくなりますか?」(渡辺登紀子)である。向き合って、対峙、対決、「奮闘」している、先生方の声は学校現場のリアルを伝える。生徒たちとともに、古典学習の意味・意義を追い続け、人間の生きること問い、追究する姿は、共感と所々の笑いと大きな励ましをもたらされる。これからの社会を生き抜く生徒たち一人ひとり进行を思い、何かに救われたり、

豊かな時間を過ごせたりする、未来につながる古典教育をとものに求め続けた。

グローバル化・情報化の進む、予測困難な知識基盤社会に対応すべく急展開している教育改革の中で、特に伝統的な言語文化、古典の学習は大きな注目を集めている。古典文学の継承と創造の問題は、文化遺産の伝達と子ども達の経験、教師による教育内容の組織と子ども達の学びの経験の総体、といった問題に通じることは理解しても、では、明日の授業をどうすれば良いのか。本書からはその答と、私たちの生きることとは古典文学に支えられる、という確かな実感を与えることができる。必ずしも専門性を有していない教員に大きなエールを送ってくれるのだ。そして、生徒たちと一緒にこれら中世文学の魅力はどう楽しむことができるか、授業の工夫をしなくてはならないか。ともに読み、ともに考え続けていきたいと強く願う。

(A5判、三三六頁、笠間書院、二〇一七年三月発行、定価二二〇〇円+税)

注

(1) 文部科学省教育課程部会国語ワーキンググループ資料(平成28年2月19日)